

【治療的コンサルテーション】 ～親子面談の実際～ (1966)

マーサ・ハリス(Martha Harris)

多くの、おそらくは大概のといっていいたいでしょうが、我々チャイルド・サイコセラピスト(児童臨床家)は、専門的業務において日常的に多かれ少なかれ長期に亘るセラピー(週1～5回のセッション)に携わっております。そのように殆ど多くの時間がごく僅かな子どもに限って与えられるのが通常であるわけですが、それとはまた別途に、われわれのうちの幾人かは、対象枠をもっと広げてより多くの人々に、それはごく限られた時間枠内でのということになりますけれど、分析的臨床から得られた洞察を有効活用する方法はないものかと思案してまいりました。例えば、何らかの緊急事態に対処するなり、そうした現場に臨む他の専門職の人たちを支援するといったことであります。これからこの論文で語られますのは、【the Association of Child Psychotherapists】での会合において、このような趣旨から幼少期の子どもの身に起こる緊急事態にどのようなアプローチが可能かといったテーマで発表され、かつ討議されたものであります。

ウィリー: 初回のコンサルテーション

ウィリーは誕生後22ヶ月目の男児であります。家庭医(family doctor)からの紹介で来所しました。彼は誕生以来、ひどく落ち着きがなく、ぐずっていることが多く、しっかり睡眠がとれない子どもでした。小児科の検査では特に器質的異常は見当たりません。鎮静剤が投与されましたが、効果はありませんでした。母親はほとほと憔悴しきっており、時を経るごとに事態は好転するどころかますます悪化してゆくようなのでした。

クリニックでの待合室で、私がMrs. Tを見かけた折の最初の印象と申しますのは、痩せ型で、くたびれたふうで、慢性的に抑うつ的で心配性の20代後半の若い女性といった感じでした。でも、もしも彼女が気を持ち直すことができたなら、十分に綺麗な方だろうといったふうでした。Mr. Tはいいますと、身長は高めで、感じのいいルックスの男性で、妻と同じぐらいの年齢です。彼も痩せ型であり、しかしいかにも健康的でアウトドア・タイプといえそうでした。ウィリーは、小柄でほっそりしていて、とても色白で、そこそこしっかりした体格ながら神経は繊細そうな印象に見えました。彼は、両親とは別に、部屋の反対側にあった家具に這い上がろうとしていました。彼は呼ばれてやっっては来ましたが、母親が私を紹介した折には私をまったく無視しました。それからさささとわれわれの前を二階へと一人駆け上がってゆき、そこで私の部屋はこっちだと目敏く思ったらしく、入室したのであります。われわれがすべて部屋に入り、扉が閉められますと、その途端彼はかなきり声をあげ、扉を開けようとして突進してゆきました。Mrs. Tは、<いつもこんなふうですよ。閉じ込められるのが苦手なんですの>と溜め息をついて言います。彼女は扉を開けておいたままにしておくべきかどうかためらっていましたが、私が動きを示しま

せんでしたので、椅子に座りなおし、ウィリーの面倒は父親に任せます。Mr. Tは、床の上に私が予め準備してあった遊具箱からトラックを一個取り出し、それを彼の方へと転がして、ウィリーの気を逸らす作戦に出ます。ウィリーは、このトラックを手にし、それを掴みとり、そしてそれを押しながら部屋中をあちこちと動き回ります。面接の間中、彼はほとんど絶え間なく動きっぱなしで静止することがありません。走り回ったり、遊具箱から他の車を取り出したり、それらを一つか、もしくは幾つかを同時に動かします。彼は窓の外の道路から聞えてくる車の音を敏感に察知して、それを身振りで示すことがあったのですが、私がそこにいることにはまったく眼もくれず、両親と私との間で交わされている会話にもまるで頓着していないかのようでありました。

すぐさまMrs. Tが私に状況説明を始めました。時折夫に助けられながらでしたが、最初のうちは不安げなようすでありましたけれど、インタビューが続くうち次第に自信を取り戻したふうになってまいりました。ウィリーが部屋のなかで何していても全然私が気にする様子が無いことに安堵したふうでした。どっちにしても彼は決して面倒を起こさないだろうし、それに父親が彼に目を光らせているのだから大丈夫といった具合だったのでしょう。

彼女が語りますに、一番困っていることは彼が日中全然眠らないということ、夜中もひどく寝つきが悪くということでした。彼は医者がいうところの‘3ヶ月痙痛 three months colic’を患っており、痛みがひどいときはからだを屈めて、のた打ち回るとのことでした。小児科医は、これまでこんなひどいのは見たことがないと言ったとか。食べ物に関していうと、彼は全然問題はないとのこと。彼はオッパイで授乳されたことはなく、エバミルクをすんなり受け入れ、それから直に固形食も食べられるようになったとのことでした。彼は哺乳瓶を離しません、食べ物を噛み噛みするのは好きということでした。彼はとても食欲旺盛で、彼の姉で10歳になるリンよりも倍ほど食べます。〈あんなに食べて、からだのどこに入るのかしら？〉と母親は訝るのです。ここで彼女は、彼は‘とてもハッピーな子ども’だということ請け合います。(このことは、インタビューの間少なくとも2回は繰り返されており、)〈でもそれは、彼を欲求不満にしなればというわけなんです。なぜなら彼はいちいち干渉されるのに我慢ならないんです〉。例えば、彼は室内に閉じこもっているのは嫌いです。なんでも新しいものが好きで、同じ場所に長く留まっていることにはすぐに飽き飽きしてしまうのです。彼は、絶えず他の場所へ移動し、もしくはなにか別のものを得ようとして、あちこちに首を突っ込みたがるのであります。買い物に出掛けたときなど、彼は自分で歩くと言い、ベビーカーを押すと言い張るのです。じっと座り続けるのにはうんざりしてしまうのです。それから彼を室内へと入れますと、彼は嫌がってかなきり声をあげ、頻りにフラットから出て外に行きたがるということです。住んでいるのは3階建てのビルの2階ですので、母親としては彼を一人で玄関先から外へ出すわけにはゆかないのです。玄関口の階段を降りるのも危ないですし。彼はしばしば転ぶことがあり、怪我をしたとしても全然気にも留めるふうでもなく、立ちどまるということもありません。それで母親のもとに慰められに来るということもありません。彼は常に日中走り回っているにも拘らず、夜眠りに就くことを嫌がります。そしてベッドに一人置かれたままにしますと、かなきり声をあげるわけなのです。ベッドタイムが近付くと、彼はいっそう動きが活発になります。彼らは、真夜中まで彼を起きた

ままにして、それで疲れて寝てしまうのではないかと様子を覗いたのですが、それでも彼はベッドに連れてゆかれることに抵抗を試みたということでした。彼の眠りはごく浅く、しょっちゅう目覚めるか、もしくは泣いて起きてしまうのです。母親は些かうんざりした顔で、彼が誕生して以来、ぐっすり眠ったことが一晩もないし、夜の外出もずっと控えているということを語ります。もしも彼女が彼を置き去りにでもして、もしそれで彼が目覚めたりすれば、彼女がやって来るまで彼は頭をベッドにバンバン打ち続けることを止めないからというわけなのでした。

彼はいつも活発な赤ちゃんでありました。彼が誕生する前ですら、それはリンとは大違いなのでした。彼女の妊娠後期、彼は胎内であちこちと忙しく動き回ってお腹を蹴っておりました。それで彼女はベッドに横になることが出来なくて、それで時には椅子に座ったまま眠るといったことをしていたわけですが。出産はごく軽いものでした。たった15分間ほどです。その直後からして、彼は抱っこしやすい赤ちゃんとは言えませんでした。それもまたリンとは大違いで、彼は彼女の腕の中よりもむしろベビーカーに座らせられているときのほうが容易に落ち着いていたといえます。彼は抱っこされたり、しっかりと掴まえてもらっていたりするのがむしろ嫌いで、着物を脱いだり着せられたりするときには悲鳴をあげますし、それは便器に座らせられたりしても同じです。〈あの子は聞き分けが悪いわけではないんです。ちゃんと解っているんですよ。それは問題ありませんの・・〉と、母親はちょっと言い訳めいたふうに私にそう言います。〈でも、彼に無理強いて問題を起こすのはむしろ面倒ですし・・〉ということでした。

彼女がそうした事態にほとんど消耗してしまい、それで医者に彼を連れてゆき、鎮静剤を処方してもらったのです。〈それを与えられますと、もうノックアウトされたみたいにしばらくはぐっすりと眠りました。だけど、必死に眠りに抵抗しているんです。そしてその後がどうもいけません。もっと事態が険悪になって、苛立ちが募ってゆくことになるわけですね〉。それで彼女としては彼に鎮静剤を与えるのもそう頻繁でありたくはないと思うということでした。Mr. Tはここで会話に口を挟み、鎮静剤投与の件については同意していること、彼の妻の疲労困憊がどんなにひどいかということを強調します。なぜならウィリーを預ける人が他に誰もいませんわけで、彼自身を除いてなのですが、実は彼は長時間勤務なのです。家を買うのに貯蓄をしなければならず、それで夕方遅くまで残業をしているからです。夏の週末には、家族は皆一緒にクリケット・フィールドへ出掛けます。そこですと、ウィリーはあちこちほつき歩いて大丈夫なのです。それで母親も心身をリラックスできるということになります。彼女はそんなふうには公園では出来ません。それはウィリーがどこかへ勝手にほつき歩いて、二度も迷子になったことがあったからです。クリケット・グラウンドでは、周りにいつも誰かしらがいて、彼を連れ戻してくれるので安心なのです。しかしながら、そこへ出掛けるのに彼らはバスを利用しなくてはなりません。なぜならウィリーは地下鉄に乗ると決まってかなきり声をあげるからです。バスにしても彼はあまり好きではありません。それで母親は、父親と一緒にウィリーの傍らに付いていてくれるのでなければ、彼と一緒にバスに乗るとするのは滅多にしないことにしているとのことでした。

以上が、両親の説明の要約であります。主にMrs. Tが話しをされたことになりますが、それも徐々

に自由闊達さを取り戻した風に話しを進めてゆき、それに折々Mr. Tが妻の話を裏づけるような情報を提供しました。その彼の注意はウィリー、妻、それに私自身にといった具合に適宜分散されてはおりましたわけです。Mrs. Tは主として私に対して向かい合っていて、ともかくここで話しておかなくてはならないことはすべて済ませなくてはと気を奪われていたともいえましょう。私は、殆ど口を挟むことはなく、時々質問して尋ねることがあったとしてもそれ以上ではなく、それからもし尋ねたいことがあればさらに彼女の話の続きを促す程度に留めておりました。その一方で私はまた、眼の隅で子どもをじっくり観察しておりました。

ウィリーはこの間、絶え間なく室内を動き回っておりました。彼は部屋中探索して回り、あっちこっちと移動し、床の上に用意してあった玩具箱の中の車だけに興味を持ちます。これらを手にしてあちこち床を走らせ、その後を追っかけることをします。彼が遊んでいるゲームに誰をも引き込もうとするわけはありません。彼は音を発することではなく、私をまったくのところ無視したままであります。1, 2度彼が私の椅子の脇を通り過ぎるとき彼に声掛けを試みたのですが、反応なしでした。それはこの年齢によくある初対面の人に対して恥ずかしそうにしていたということではありません。むしろ彼は私を人として認知しているふうではありませんし、また私という存在のどのようなことにもまるっきり視野の内に無かったとっていいでしょう。彼は部屋中あちこち戸棚やら引き出しを開けようとします。が、すべて鍵が掛かっておりましたから、何度も何度も彼はそれらを開けようとして取っ手を引っ張ります。かなきり声をあげることはありません。両親に向けてなんとかして欲しいといった訴えをすることもありません。彼は家具やら椅子、ソファ、机の上へと這い上がり、それで窓の外を眺めます。彼は路上から聞えてくる車の騒音やら、廊下で誰かの話し声がしているのに気がつく、それにしばらく耳を澄ませます。しかし両親が話しているのには興味を示すサインをまるで見せません。話題の中心が自分であるという認識もまるでなさそうであります。

それから、インタビューの後半ぐらいになってMr. Tが煙草に火を付けました。ウィリーは何やらことばとも言えない音を発します。それは最初のかなきり声から初めてであります。彼はその煙草の箱に飛びつきました。父親は彼をからかうように、それを彼から取り上げるふりをしました。が、(母親と私に向かって) <大丈夫、持たせておきましょう。箱は空ですから。欲しがると思ってた・・>と言います。ウィリーはそれを両手でしっかり握っており、いかにも決然とした面持ちです。それからちょっとブツブツと言ひ、少しばかり笑みを浮かべます。母親の膝の上に乗っかり、そこでしっかりと落ち着き払ったふうに居座っております。煙草の空箱を手の中にギュッと握りしめ、父親の方をしっかりと油断なく注視しております。その目に一瞬悪戯っぽい表情が浮かびます。母親は悲しげに<いいわよ。私の膝に座ってても。ママが守ってくれるって思ったわけね。だけど普段だと、ママの膝に座るのって好きじゃなかったわね・・>と。それから私に向かって、<こんな具合ですの。空箱を絶対どうあっても諦めないんですの>と言います。ゲームがこれからちょっと続きます。父親が彼からそれを取り返そうとするふりをします。ウィリーは絶対渡すもんかといったふうにそれを固く握りしめ、概して真剣な面持ちではあるものの、ちよっぴり愉快げに感じているといったふうでもありました。Mrs. Tはそれから私に向けて、<ほら、ご覧になってください。

私が「もう寝んねよ。バイバイね」と言ったら、彼がどうするかを…。彼は疲れているはずなんですけどね。なにしろ今朝の6時頃からずうっと起きて動き回っていたのですから…。ウィリーは彼女がそう言うのを耳にしますと、背筋をぐいと伸ばして抵抗を示します。それから彼女の膝から降りてしまいます。それから玩具の車に戻ります。手にはまだ煙草の空箱が握られていました。母親の鞆の脇を通りがかったとき、彼は哺乳瓶を取り出します。しばらくぐくぐくと勢いよく飲んでおります。2オンスは飲んだでしょう。それからそれを手にしたまましばらく歩き回っておりましたが、やがてそれを元に戻しました。

インタビューは、この後しばらくして終わりました。この時間の終わりに近づく頃、ウィリーはだんだん落ち着きがなくなり、部屋の扉のハンドルを何度も何度も引っ張ります。しかしこのとき彼は父親の膝の上へと来て乗っかり、彼の手を取り、それから彼を引っ張り上げようとしていました。彼はこれらのすべてを泣くことも語ることも無しにしました。ちょっとそれらしき音を発したみたいでしたが。それから頭を父親に向けて、さらには扉に向かってぶつけたのです。彼がこれをしているとき、母親が私にくたぶん話が出来るようになれば、少しはましになるんだと思うんですよね。自分がどうして欲しいかって言えないって、ひどく気持ちが焦れないはずはありませんものね」と語ります。

このインタビューで、私は何ら助言も解釈も一切しておりません。私のコメントならびに質問は極力状況がいかなるものか、その実態 (picture) を把握することでありました。まずは両親に彼らの語りたことがらを思いつくまに自由に連想してもらうことなのであります。私はまた、私がウィリーに興味があるということを示したことにもなりましょう。実際のところ、彼はその振る舞いからして己自身のありのままをさまざまに示してくれており、また両親並びに私に対して彼なりの関係付けのありようをもいろいろと見せてくれましたから、十分に興味深かったわけです。

この終わりの頃、Mrs. Tは私に向かって不安げに問います。〈どうお考えでしょう？〉と。恰も彼女は私の審判を恐れているかのようでありましたし、また幾らか魔術的な何か、予期せぬ打開策といったものをわずかに期待しているかのようでもありました。そこで彼ら両親に対して私が述べたことは、確かにお二人が抱えている問題に対して何か解決になることを見つけるのは簡単ではなさそうですが、これから一緒にさらに話し合いを続け、そしてよりよい理解を得られるよう努力しますならば、そのうちきっと何かしらお役に立つことにもなりましょうといったことでした。Mrs. Tにとって睡眠を妨げられることがずうっと続いているということでどんなにお疲れのことかということとはよく解りますし、それでウィリーに対して時としてはひどく激しい怒りを覚えることも当然でありましょうと述べました。そのことは、些か罪悪感を覚えるふうに彼女が説明しながら或る時点でふと漏らしたことだったのであります。それで私は、母親に休息を与えるといったことにまず何よりも実際的な対策を講じることが今や最も重要なことではなからうかと両親に告げました。私は簡潔に、終末のクリケット見物に触れ、その折Mr. Tがその道すがらウィリーの世話をしたこと、そしてフィールドでウィリーは自由に動き回れるといったわけで、Mrs. Tそしてウィリーにとって互いに今最も必要とされる息抜きがもたらされるということになりました。それはまた実際のところそれと同じことがここで今朝私の部屋においても起きていたともいえましょう。母親と私が話

している最中、父親がウィリーを見守ってくれたわけですから…。父親は仕事を抜けてくるのが難しいということでしたので、その彼を除いて私はもう一度母親にウィリーと一緒に翌週にまたお会いすることを約束したわけでありませう。

ウィリー：第2回目のインタビュー

これは実際のところ3週後の面接になります。と言いますのは、Mrs. Tが予約をキャンセルし、またその翌週が「聖霊降臨祭」のお休みだったからです。

待合室に彼らを出迎えた折、私はMrs. Tの豹変したさまを見てびっくりいたします。彼女の髪の毛は綺麗にセットされていて、いかにもはつらつとして健康そうであり、美しく見えました。彼女は私に親しげな挨拶をし、そしてウィリーの名まえを呼びます。驚いたことには、彼はすぐさま私に笑みを浮かべ、まるで私が古くからの知り合いでもあるかのようにコンタクトしてきたのです。二階の私の部屋に皆が落ち着いたとき、Mrs. Tが開口一番、<この子、良くなったんですの。どうしてなのかはうまく言えないのですけど。確かに良くなったんですのよ>と言いました。

私が、どんなふうに良くなったのかと尋ねますと、彼女は彼の方を指差し、ご自分の眼でご覧になられてお分かりでしょうと言います。確かに、彼は随分とこの前とは違ったふうであります。穏やかそうですし、苛立っている感じはごくごく少ないと言ってもいいでしょう。事実はまさにそんなふうでした。しかし私にとってもっとも著しい変化と見えたのは、ウィリーのわれわれ二人のどちらに対してもその関係付けのありようが違っていることでした。

彼は以前のように玩具の入っている箱に行き、2つほど車を取り出し、自分でお家から持参してきた車と一緒にします。でも彼は、母親そして私にも注意を払い続けていて、どうやらわれわれが話していることに耳を傾けているみたいですし、どうやらわれわれが話していることも理解できているようなのです。彼は床に車の一つ置いて、私の方へと転がします。そして私がそれを彼の方へと押し戻してやりますと、彼は顔を輝かして私を見ます。そしてちょっとためらった後にもう一度私の方へと車を走らせませう。2、3分の間、こんなふうに車でわれわれは一緒にゲームしたことになります。車を互いにあげたり貰ったりです。その一方で母親が前回の訪問からどんな進展があったのかを語ってくれておりました。

彼女は、その後2回ほどひどい夜があったと語りませう。最初の晩については、それはバスに乗ったせいでと言います。彼はバスに乗ると必ず動揺を来させなわけなのです。二つ目は嵐で雷が鳴ったからです。しかし、彼女とその夫はクリニックへの訪問のことを互いに話し合い続けたんだそうです。彼らは、私が一つ或る時点で彼らに尋ねたこと、すなわち<特にウィリーのお気に入りの何か好きなことがありますか？それがあれば、ベッドに寝かせられるときにもっと彼の気持ちが落ち着くということにはならないでしょうかしら…>について考えたんだそうです。それで彼らは、数ヶ月前のこと、小さな従妹が揺りかごの中

に入れられて泊りに来たことを思い出しました。ウィリーはそれにひどく魅了されたのでした。そこで父親がウィリーのためにブランコを作ってやることになり、それをキッチンに据え置き、そして母親はウィリーを食後そしてベッドタイムの前にもそこに座らせるようにしたのです。そこで45分ほど居続け、馴れた頃には彼は自分でぶらんこを揺ることをし始めました。そこで母親は初めて日中休息を得たということになります。そして彼はベッドタイムになった頃には随分と落ち着いた感じになっているといったふうなのでした。彼はもはや大暴れすることもなく、とても従順になってきており、もし彼女が15分ばかり彼の傍らに横になってあげていれば、それで簡単に彼は眠りに落ちるようになってきたのです。彼らは彼に柵付きの小児用ベッド(cot)ではなく、小さな普通のベッドを買い与えたのです。夜中に目覚めることはあったものの、以前に比べるとすぐにまた寝入りますし。これまで2晩か3晩、まったく目覚めなしにぐっすり寝たのであります。そこで、と母親は付け加えます。ウィリーの出産後ほんとに初めて彼女は、夜に友人と一緒に外出できたのです。父親はその晩ベビーシッターとしてウィリーの面倒を見なくてなりませんでしたが、とにかくまるで世界がひどく変わったみたいなんです。あの子は完璧というわけでは決してありませんけれどもね・・>と、彼女は微笑を浮かべて言いました。<ちょっとぐらいトラブルがあったとしても、それがいつもいつも永久に続くというわけではないと知っていれば、何とか耐えられますわね>ということでした。

彼女は、彼が自分一人で玄関先の階段を昇り降りできるようにしてあげたらどうかしらと考えたのです。それで丸2日掛けて、後ろ向きの姿勢で階段を降りることを彼に付きっきりで教えたということでした。彼女は彼がまずまずどうにか大丈夫とその安全を確信できたとき、彼を一人でフラットから出てゆくことを許したのです。それは彼が今や自分で階下の裏庭へといつも好きなときに一人で行って戻ってこれるということを意味します。そこで彼女はいつも彼の傍らに付いていなくてもよくなったわけです。そのお蔭で公園でも彼を安心して見ていられるようになったみたいなのです。もう彼があっちこっち駆け回って、戻ってこれなくなるということを心配することもなくなったわけですし、彼女はそこに座ったままでリラックスしていられるわけです。彼は人々に対してこれまでになく随分と友好的になってきたということでした。以前ですと、まるで彼は誰にも注意を払う余裕などなかったわけですから。事実或る日のこと、隣人が彼女に尋ねたんだそうです。<ウィリーはどうかしたの？まるっきりこれまでと違うわ。社交的な男の子になっちゃってるじゃないの>と・・。

この間、ウィリーは車で遊んでおりました。最初それらを私の方へと疾走させることをしました。それからソファの下、机の下、そして部屋の隅へと車を走らせ、それからその後を追掛けます。彼は家具の上に這い上がります。それは前回にしたことでもありましたが。彼は窓側にあった肘付き椅子に上って外を眺めます。彼は椅子のクッションを除けます。スプリングの真上に立ち、それでよろけて机の角に頭をぶつけてしまいます。彼は痛みと怒りで吼え、そして母親の膝の上へと駆け寄ります。彼女が彼を抱きかかえてやりますと、彼はどうにか落ち着きを取り戻し、私の方をちょっと咎めるふうに見ておりました。そしてまだ手にしっかりと握っていた私所有の車を私に手渡したのです。母親はそれでちょっと狼狽し、彼の額をすばやく撫で、それから手提げ鞆のなかから哺乳瓶を取り出します。彼は額のぶつけたところ

をトントンと手で打ちます。哺乳瓶からミルクをごくごくと熱心に飲んでおり、それですぐさま泣くのを止めました。ここで母親の不安は、どちらかという彼の立てる騒音、それに対しての私の反応を気に掛けていて、実際に彼が怪我をしたことは二の次になっていたといった印象があります。彼が泣きやんだので、彼女はすぐに気持ちが楽になったみたいですし、彼が彼女の膝の上に丸くなって居心地よく納まっているのが嬉しいようでもありました。それから彼が向きを変えて、口に哺乳瓶を咥えたまま、彼女のオッパイを何度か手で叩いたとき、声を出して笑いました。

彼女は彼に話し掛け、窓の外の誰を見ていたのかしらと尋ねます。しばしば父親が、それにリンが帰宅するのをそんなふうにして待っていることがあると彼女は私に語ります。彼がそれを耳にしたとき、私の方を見て、問いたですように「パパ？」と言います。それから素早くせかせかした感じで母親の膝から降り、私の手許に戻した車を再び取り返し、再び床でそれを疾駆させて遊び始めました。Mrs. Tは私に、「あなたのおっしゃることが解りますのよ。ちゃんとお話できますし。試してご覧になって」と言います。それからウィリーに向かって、「リンは何処かしら？」と尋ねます。すると彼は手を止めて、しばし考えているふうでしたが、「リン、ガッコ・・」と言います。母親がそれを言い直し、「リンは学校よね」と言います。それから再び私に何か言ってみてあげてくださいと促します。そこで私が、「パパは何処かしら？」と言いますと、彼は「パパ？」と言って、それから扉の方を見て、窓際へと走り寄ります。私が「パパは学校なの？」と尋ねますと、彼は首を強く振り、「違うよ、リンがガッコなんだよ」と、いかにも私をお馬鹿さんだと言わんばかりに返答します。それからさらにもう少し会話が続きましたが（この記憶がはっきり致しません）、それは彼自身にしてもですが、彼の賢さを見せびらかすことが出来たことで母親にしてもいかにも満足げに見えました。

Mrs. Tは、「この子は話せるようになってぐんと落ち着きましたわ」と言いました。「それがおそらくトラブルだったって思うんですの。欲求不満になっていて、それも自分の思うことがどうしても解ってもらえないってことだったんですよ。それに近頃は、そんなにかつてほど無茶喰いっしないんですよ。それというのもこの暑さだからですわ。食欲が減退し、それであんなに大食漢だった癖が抜けて、駆け回ってエネルギーを発散させずに済んでるということでもあるでしょうし・・」と言います。彼女はそうした推測をあれこれ試みてまいります。「どっちにしても、ウィリーは常に活発でからだを動かすことが大好きな傾向があるわけで、それも彼生来のもので、おそらく夫に似たんでしょう。彼は2つの仕事を掛け持ちして、常に駆け回っているんですから・・」ということでした。

母親が私に夫の仕事について話している間、ウィリーは車を走らせることに夢中になってはいましたが、こちらに耳を傾けており、どうやら疎外されているふうに感じているようでした。彼はソファーに故意にからだをぶつけます。しかしほんのちょっとだけでしたが、それでもいかにも哀れっぽく「ねえ、ねえ、こっち見てよ」といった感じでしくしく泣き、そして傷ついたところを見せに近付いてきます。母親は撫で撫でしてやり、そこにキスしてやります。彼はひどく満足げであり、それは彼女にしても同様で、それで彼は自分の遊びへと再び舞い戻りました。彼女は私の注意を促し、こんなことは初めてだと語ります。とて

も抱っこしやすい(cuddly)子になってきたということでした。今や時折彼は、リンがかつてよくそうだったと覚えがあるのですが、彼女に抱っこをせがむなり、膝の上に乗っかるといったことをするようになっていて、抱っこしてやるとしばらくジッとされるままにおとなしくしているとのことでした。このインタビューの時間の終わりに立ち上がりながら彼女が語ります。<ほんとうにどんなに以前と違うかということといえば、私が今や彼と気持ちが通じ合えるということですよ I can get through to him now。以前ですと、気持ちが擦れ違うというか、私、彼と気持ちを通じ合うのが全然ダメでしたの>と。。

ウィリーは去りたくなさそうでした。しかしやつのことで部屋の外へ足を踏み出しましたが、手には私所有の車をしっかりと握って離しません。母親が<それと別れるのが厭みたいですよ>と言います。しかし、玄関口でお別れするとき、私は彼にそれを返してくれるようにと言います。次回来たときにそれでまた遊べるということを彼に伝えます。彼は私の顔色をじっと覗いておりました。私が本気で言っているのかどうか探っているみたいでした。それでやはり本気で言ってるらしいと解ったらしく、どうやらまずは快くそれを手放すことに決めたようで、それで<バイバイ>したわけです。(しかしながら、この別れは実際のところ少しばかりわだかまりを残したみたいであります。次回にやってきたとき、それはクリニックへの最後の訪問でもありましたが、彼は私に対して親しげに挨拶はいたしましたものの、遊戯箱の中の私所有の車へとまっすぐに向かってゆき、それを引っ掴むや母親の手提げ鞆の中へと仕舞い込み、蓋をしっかりと閉じて、さっさと帰ろうとしたのであります！)

ウィリー：第3回目のインタビュー

この3回目は2週間後に予約され、今回はキャンセルはなされませんでした。このインタビューの詳細については省くことに致します。全体の印象としては2回目のインタビューと類似したものであります。Mrs. Tはウィリーが睡眠の問題では随分と進歩があったことを報告しています。彼女は日中ウィリーがほとんど自分ひとりで遊んでいて、だからからだを休めることもでき、彼に縛られることも少なくなったと語りました。彼は、哺乳瓶を欲しがることが減ってきており、事実この日彼女は哺乳瓶を用意してきておりません。頭を執拗に叩き付ける習癖は止んだとのことでした。

さてウィリーはというと、彼は前回と同じく私の部屋のなかで遊んでおりました。彼はわれわれのどちらにも話し掛けました(前回私が彼に欲しがった車をあげなかったという恨みが内心にはなかったにも関わらず。。)。そして2回ほど母親のところに抱っこやらちよつとした注意を引くためにやってくるということがありました。

Mrs. Tは、彼女の妊娠時期について詳細を語り始めます。子どもたちのどちらにも母乳を与えられなかったという失望やら挫折感についても。。私がここで得た印象からしまして、彼女はたぶんリンが誕生した後しばらく抑うつ的であったのではないかと思われまふ。しかし、リンはウィリーに比べればさほ

ど表面切って要求がましくもなく、またどちらかという‘おとなしい子ども’だったように見受けられます。それで彼女はリンとは何とかうまくいっていたのだと思われます。彼女は明らかに2番目の赤ちゃんの出産は望んでいなかったのでしょう。9年後にウィリーを妊娠したとき、それは歓迎されざる驚きといったことでしたわけで。しかし彼女はすばやく2番目の赤ちゃんの誕生ということに頭を切り替え、一旦ウィリーが誕生した後では一瞬たりとも彼と離れることなど考えられないといったふうだったのは確かのようにあります。

このインタビューの最後で、彼女は事態が悪化することがなければ、もう来所しないつもりでいることを選択しました。彼女はこの折に、隣人に或る困難を抱え、閉じこもりがちな青年期の子どもがいて、その子が突然不登校になったという話をいたしました。そこで彼女は、彼には援助が必要であり、だからぜひともこのクリニックを訪れるべきだと主張します。彼女は、ウィリーのことで事態がもっと深刻化する前にここに相談に来られたことは随分とラッキーだったと喜びを隠しません。彼は今やどんな見知らぬ人にも打解けますし、学校に行くこともおそらく問題はないでしょうと彼女は考えたのです。このことでは明らかに安心しているかのようでしたが、ここで私が、もしも将来何か問題の起きるようなことがあれば、その時はここに再び私どもに相談しに訪れたいと思われることもありましようと言いますと、それにはくきつとそれはあり得るでしょうね」と彼女は答えました。しかし今のところはそうした兆しはまだなさそうです。その後のGPからの報告では、殊更ウィリーに問題が起きたということは無いもようであります。

考察

専門家が子どもおよび両親に数回のインタビューに限って会うといった場合、そこで多くの問題が提起されながら、依然として答えられないままで終わるということは避けられません。多くの極めて関連性のある情報が未知のまま、そしてそこでもたらされる変化の程度も或いはその性質も多かれ少なかれ不明瞭のままといったことは止むを得ないわけであります。ウィリーとその両親との最初のインタビューの後、私としましては状況が劇的に、或いは即刻に変わるといったことのかな感じを抱くことはありませんでした。私の印象では、両親の関係性には基本的に愛情があり、Mrs. Tが些か腹立ちを覚えていたとしても、彼らはウィリーを好いており、彼のことを真剣に案じているということは疑いないといったものでした。ウィリーの病気については、それがどの程度深刻なものかは不確かでありました。それがはたしてそこに覗かれた抑うつ感の原因であるのかどうか。母親の彼について説明したことがらと私の彼の行動観察、特に彼が私自身をまともに直視することもせず、また両親に対しても概してそのようであったということですが、それはごく深刻な程度の情緒的および知的な障害を示唆していたと思われるかもしれません。その一方で、目には輝きの片鱗があり、父親とちょっとした悪戯っぽいやり取りをする様子からして、彼が最初の印象とも違ってしっかり周囲を観察していて、それに直接に触れ合ってもいるということが覗かれたのです。2回目以降のインタビューでの彼の行動は、むしろこうした後者の印象がさらに確認されたと言ってよろしいかと思われます。

最初のインタビューと2回目との間の3週間に何が起きたのかということを推測しますと、ここでMrs. Tの語った言葉がヒントになるかと思われます。〈ほんとうにどんなに以前と違うかということであれば、私が今や彼と気持ちを通じ合えるということですね I can get through to him now。以前ですと、気持ちが擦れ違うというか、私、彼と気持ちを通じ合うのが全然ダメでしたの〉といったことです。そこで、何故彼女はそのように彼と気持ちを通じ合うようになったのか、ここでそれについて手短かに考察してみるのも意味がありましょう。

私が思いますのには、彼女がこちらでの最初のインタビューにおいて私に気持ちを伝えられたという、その経験の後でそれが可能になったと言わざるを得ません。そしておそらくは彼女の夫に対してもそうだったのでしょ。それは決して彼女が以前為し得なかったことだったように思われます。両親が共に来所し、一緒になって彼らの息子に責任を引き受けるといことがとても重要でありました。そうしてこそ彼らは自分たちの問題—すなわち両親として無力であるという感情—をこうした問題に対処する上で経験のあるはずの‘専門家’に打ち明けることが可能になるわけであります。しかしながら、この場合の‘専門家’にしても、高度な知識を持ったところの‘上から目線’で、彼らに対して何をどうすべきか、或いはこんなあんなことはすべきではないと教え諭すといったふうに、彼らを‘無力な子ども’扱いにしているのではないのです。そもそも彼ら自身、不適切でかつ‘偽者’の両親であると見做されるのではないかと、それで子育てに責任を負うことが出来ず、従ってもっと権威ある人に依存しなくてはならないのではないかと‘子どもっぽい恐怖’を抱いているわけですし、それでやっぱりそうなのだという具合にそれを強化してしまうことになりかねません。こうした状況において助けとなる専門家とは、むずかっている赤ちゃんに対して理解を示す母親が、赤ちゃんの不安の投影を受け入れ、それと共にあって(with it)、そして赤ちゃんがもはや一人きりではないと感じられることでどうにか痛みを耐えられるようにしてあげるのに類似した働きをするものと言っていいかと思われます。子どもがうまく伸びてゆかず、母親がどんなにその子のストレスを緩和しようと努力しても反応しないといった場合、それは彼女自身の幼兒的な無力感および孤独感を喚起させがちであります。そうした母親は、何とか出来た、大丈夫だったといった経験からもたらされた自信を簡単に手放してしまいがちであり、そして母親として適性がないのではないかと、それまで防衛できていた自己への信頼感もつい萎えがちとなるのであります。

どうやら私は両親にとって、彼らのどちらにも、またウィリーにも関心を大いに抱いてくれる人として見做されたようであります。そしてまた、彼らに代わって彼らの問題を解決するといった魔術的なノウハウを身に付けた人としてではなく、問題を共に話し合い、理解するべく努力してゆけばそのうち彼らにとっても役に立つことになろうといった希望を与える人としてでもありました。これが彼らに問題をさらに徹底して考えてゆこうという気にさせたということでありましょう。事態に対処すべき新しい方法を見つけ出すために彼ら自身の観察そして直感を活用し、そして彼らに固有のユニークな発想、また子どもについて日頃彼らに備わっている知識などを援用するといったことであります。彼らは、私がウィリーには特に何かお気に入りはないかと尋ねたことに、どうやら俄然励まされたふうであります。そして事態を再びよくよく吟味し、彼の感覚(フィーリング)をより深く理解するよう努力し始めたようであります。彼らは揺りかご

のことを思い出します。そこからウィリーにブランコはどうだろうと、そのアイディアに辿り着いたのはまさに父親の直感であったわけです。

最初のインタビューでもMr. Tは妻に対してサポートを惜しまない、十分に思いやりのある人のような印象ではありましたが、しかし彼は2つも仕事を掛け持ちしていて、あまり家で過ごす時間は多くなかったというのははっきりしております。家族のためを思えば、ここで仕事を一つに限って、もっと家に居る時間を増やすようにと助言しても良かったかも知れません。しかし疑いもなく、それは将来家を購入するための資金稼ぎのためで、だから家族のためを思ったことであつたわけですし。ですから、まだ知り合っていない状況で、こうした助言を与えることは無遠慮とも僭越ともいえます。彼が妻とウィリーに伴って来所するようにとわざわざ招かれたことと、それから敢えて申せば私の態度からも、彼はウィリーの父親として、そしてその母親のパートナーとしても大事な役割を担っているということを再確認させられたはずであります。そして妻を助けるのに何とか知恵を働かなくてはといっそうその気にさせられたということでしょう。このインタビューの結果、今やこれまで以上に彼女の夫からのサポートと注目を得たこと、それがMrs. Tに新しい人生そして希望を与えた重要な要因の一つであつたかも知れません。それからもう一つ、彼女の無力感が真剣に取り上げられ、それに対して咎め立てされるわけではなかったということは慰めでもあつたでしょう。それで、これまで以上にウィリーに対してエネルギーを注ぎ、彼女自身を与えることが出来たということであつたとも考えられます。Mr. Tがこの最初のインタビューに参加していなかったとしたら、そして自分の家族の抱えるニーズに対してここまで敏感に反応することが出来なかったとしたら、事態がこれほど迅速に進展していたかどうか私としては疑わしく思うのです。

ブランコはウィリーにとってどんな特別な意味づけがあつたのでしょうか？何故だつたのでしょうか？彼の母親の説明に従うとしますと、事実そうであつたということになるわけですが、それほどに彼を落ち着かせ、彼の過多活動性が緩和されたことにそれはどんな役割をなしたといえるのでしょうか？私はそれについて、私の児童サイコセラピイの経験、それから母子交流の発達についての長期に亘って詳細を極めたところの観察の機会(Bick, 1964)に基づいて、ここで幾らか暫定的な試案を述べることに致しましょう。ウィリーのように落ち着きのない過活動の子どもの場合、しばしばたくさんの注意が、そして頻繁に抱っこされる必要があります。が、そうした抱っこにしても、あまり密着せず、もしくはあまり長引かせないということが肝心であります。その子は容易に「閉所恐怖症」になりがちだからであります。われわれはウィリーが閉所恐怖症ぎみといつてもいい証拠をたくさん手にしています。両親が伝えるところの報告からばかりではありません。私の部屋の中での彼の行動からしてもそれが覗かれるのであります。こうした場合の母親は、そうした幼子にどうにか耐え、落ち着かせることができるためには、彼女自身のなかに自信と安心感が大いに必要なのです。もしも不安に陥りがちであるとしたら、彼のニーズを充分意識できたとしても、それらは過剰な負担としか感じられず、それに対応せんと努力しながらも得てして同時にからだを強張らせ、子どもを遠ざけんとしがちになるかと考えられます。(Mrs. Tは、ウィリーを妊娠していた期間中、最後の月頃にはからだ緊張し切って熟睡できずにいたということを語っております。)母親のぎこちなさ(woodenness)と抑うつ感子どもの不安感を募らせ、そして彼女の中の

「いのち」から何らかの‘慰めのサイン’を得ようと子どもは躍起になり、そして彼女の内に潜り込んで一つになろうとしたり、彼女から何物かを求めんとしたり、そうしたニーズはいっそう熾烈になるわけでありませぬ。頭を壁などに繰り返して叩きつけるといったような暴力行為、それに彼自身を母親へと投影しようとする飽くなき執拗さは、それに付随して対象の内側に捕えられ閉じ込められるといった恐怖を惹き起こすことになるわけでありませぬ。それら対象は彼自らの敵意を含んだ、かつ略奪的な衝動を抱え、かつそれに色濃く彩られているといったわけでありませぬから。(ここで最初にウィリーが私の部屋めがけて一目散に駆けていったことを思い出してください。何ら恐れ気なしに廊下をまっすぐ突っ切って行ったわけです。それなのに、部屋の扉が閉められた途端に、彼の緊張が嵩じ、かなきり声をあげ始めました。それは一見して、まるで‘内側 inside’に捕えられたと彼が感じたふうであったわけです。)

ブランコは、ウィリーにとって‘抱えてくれる対象 a holding object’ではなかったかと考えられませぬ。彼はそれにいのちを与え、そして揺らすこともできたというわけです。‘木偶人形みたいに無表情で wooden、死んだ母親’を彼は内側に絶えず抱え込んでいて、しょっちゅうそれから逃れようとしていたわけですが、それとは画然とした相違があるという意味合いで、ブランコは彼にとって大いに慰めであったものと考えられませぬ。Mrs. Tは、彼を食後にブランコに座らせることで、そんなふうウィリーのところに枠付けが設けられることを直感的に理解していることが覗かれませぬ。がつがつ貪り食うといったウィリーのような子どもの場合、消化不良を起こすのではないとしても、彼が自らのうちに摂り込んだものの性質について疑心を覚え、それで苦しむといったことが起こりがちでありませぬ。

食物は基本的には母親から貰うものでありませぬから、幼子は、母親が彼の飽くことを知らない貪欲さゆえに消耗してしまうこともなく、そのいのちを永らえ、それで彼を大事に思い慈しんでくれるといったことが保証され、かつ慰めてもらう必要が大いにあるわけなわけです。Mrs. Tは、明らかにこれを自らの‘両腕’でもって彼に伝えてやるのが難しかったようでありませぬ。己自身の代わりに哺乳瓶を与えることで彼に慰めと保証を与えるといった営みは、恐らく(一見したところでは)危機的状況においては有効であったとしても、長い目で見ますと、彼の内に‘萎え衰え、憔悴しきった、酷使されたともいえる内的対象’を抱え込んでしまっているといった、そうした不安感が得てして強化されがちなわけです。

ウィリーにとって、ブランコは或る意味‘コンティンしてくれる母親’といった役割を担うものではなかったかと思われませぬ。それが彼の「いのち」へのニーズに対して‘動き movement’で応えてくれるものだからです。詰まりのところ、それは彼が逃れることも出来て、息が詰まるといった脅かしがないといった意味合いでもそうでしょう。Mrs. Tにとって、ブランコはまた彼女自身の身代わりともいえませぬ。それは彼に慰めを与えることができるといった満足感をもたらしました。またそれは彼女自身が十分に疲労回復でき、侵入されていると感じないで済むためにも必要な‘休息’でもあったわけです。こうして母子がお互い同士‘小休止 break’を持てたことで、どうやら彼らは相互にもっと密着した、愛情のこもった接近が可能となり、また身体的な接触からいっそうの喜びが得られるようになったと見ていいでしょう。ウィリーのかつての要求がましさが減ったこともあり、それでMrs. Tはこれが‘永久に続く’わけではないと思

うことで、どうかそれを負担に感じ過ぎることもなくなっていったわけでしょうし、それで彼女自らをもっと彼に与えてやろう、そしてウィリーを一人の人として、もっとパーソナルでかつ豊かな関係性を築いてゆきたいとも感じられたのでしょう。状況は、こうして彼女のこころの中でコンティンされ始めてきたといえるのであります。そして事態に対処する上でもっと思考を巡らすことができるようにもなりました。事実彼女は面倒を厭わず、ウィリーに玄関口の階段を自分でどうか昇り降りできるようになるのを手助けしたわけであります。そして彼女の許可を得て、今や彼は思う存分に外へと探索を拡げてゆけるようになったということになります。

母親とのこれまでなかった受容的な関係性を経験したことが、たぶんウィリーの言葉が突然開花したことに関連付けられましょう。話しながらも自分が理解されているという自信が募っていったとき、言葉を覚えるのはそれだけ彼にとって努力の甲斐があることになったでしょうから。母親のコンティンする能力が増したこと、そして全面的に彼のニーズに対して応えられる能力が増したことで彼の不安感が減少し、彼は己自身から、そして彼の経験からも性急に逃げずともよくなったということでしょう。彼もまたそれをコンティンすることができるようになり、それらが意味するものを自ら納得するのに十分な時間を掛けて考えることもできるようになり、自分の考えたことを伝える際も、それが了解されるという期待感を抱けるようになったということでもあります。彼は母親と‘ラポール(こころの通い合い)’を築けたことから、いっそうに社会性をも伸ばしてゆけたといえましょう。それは隣人から伝えられた言葉からも十分に察することができます。そして事実それは私への接近においても明らかであり、怒りやら、苦痛、そして愛情といったフィーリングを表出することに俄然自信が出てきたともいえます。彼が自分をいっそう知性的に、適切に、かつ人の気を引き付けるように愛くるしく表現するとき、人々からそのお返しにより適切で友好的な応答を引き出せるようになったということでしょう。誤解されたり、迫害的に感じたり、そして迫害せんとしたりといったことの悪循環は今やどうか断ち切られたといいようであります。そうありますから、今や彼にとってリラックスすることが容易になってきたわけです。そしてハッピーな経験の一日が彼のなかに留まってくれて彼のこころを慰めてくれますから、就寝時に目を瞑ることも容易になってきたということなのでしょう。

これら上記のコメントは、徹底的にすべてを網羅したところの見解とは言えません。もし他の方でこうした治療的なコンサルテーションの経験のおありの方でしたら、ここで起きたプロセスについて異なった参照枠でもって説明なさるかも知れません。とにかくにもこれらはすべて事が終わった後での解釈なのであります。ウィリーにも、或いは両親にも直接伝えられたわけではありません。こうした理由から私は、こういったインタビューは、精神分析的サイコセラピイの訓練を得ていなくとも、さまざまなメンタル・ヘルス及び概念について何らかの素養を或る程度身に付けている人でしたら、大いに実践され得ると言っているのではなかろうかと考えます。

それらインタビュアーに不可欠な必須条件は何かといえば、それは‘興味を抱ける能力 a capacity to be interested’であろうと考えられます。即ちそれは親と子のどっちの味方に付くわけでもなく、全体

の状況を包括的に把握し、両親をして自らの感覚(perception)に従うことを大いに奨励してあげることなのです。彼らの有するところの潜在的な‘資源 resources’を十分に活用させることであって、彼らの無力感、依存性、敗者意識といったフィーリングを募らせることがないようにといったことでもあります。無益な助言を与えることを控える能力、役に立つ助言と干渉(おせっかい)とを区別できる能力といったことは苦い経験から培われてゆくものであります。しかしそれもそこから或る程度は学ぶことが出来ますし、悪くないともいえましょうが。私はこれまで、研修生が週ごとに家庭を訪問し、母親の赤ちゃんとの関係性がどのように育ってゆくかを、その最初の1、2年の間を通して観察してゆくなかで、徐々にそうした能力が育ってゆくことに気づかされたのであります。それを私自身もまたそうした学びをしたことで、さらには他の方たちの、そうした観察を発表するのに耳を傾けながら、それに気づかされたということでもあります。私は(その幾つかの事例において)、観察者がただひたすら母親と赤ちゃんに興味を抱くことだけでも‘治療的効果’と呼べるものがあることにとっても驚かされるのでした。そうした場合の観察者は、母子が共に関係し合い、互いに慣れ親しんでゆくことへの努力に敬意を抱いていて、そこには不当な競争心もありませんし、母親の不安感やら愚痴を聞かされ、それで非難するといったことも全然無いわけであります。こうしたことから、母親は自分はまだ若くともちゃんと親として大丈夫やってゆけそうだといった自信やら、子育ての価値についてもその信頼感が大いに揺るぎのないものになってゆくようなのであります。

疑いもなく、たとえ問題が生じたとしても、それに対処するべく、両親ご自身それぞれのなかに、また互い同士そして子どもとの関係性のなかにおいても、潜在的な活力やら理解力があまらうから、それでごく自然に、或る程度は解決の糸口を見つけだすことがあるかとも考えられます。それから勿論のこと、多くの事例が、両親が、もしくはまた子どもも深刻に病んでおり、それで私がこれまで述べましたような類いのコンサルテーションから何ら有益なものを得られないといったことも想定されましょう。しかしながらそうではない場合には、実に多くの方々が、専門家に時宜を得た接触を試みることで、家族が互いを知り合うといったユニークな機会を活用することで励ましを得て、さらに問題に取り組んでゆく努力を続ける価値があるとの期待が募り、そのように彼ら自身が‘よりよい生き方’を模索せんとすることへ向けて援助されることは可能ではなかろうかと、私には思われるのであります。

(訳出; 2015/11/05)

※原典; 【Therapeutic Consultations】

by Marth Harris

Journal of Child Psychotherapy(1966),vol.1,pp.13-19

【訳者あとがき】 ～‘まなざし’の回復ということ～

山上 千鶴子

これは何と嬉しいマーサ・ハリスなのでしょう！この臨場感溢れる論文をとおして、親と子を前にして、いつもの柔らかくかつ真摯な彼女の‘まなざし’が、その場の成り行きを穏やかながらもジッと見据えている、そんな揺るぎのない臨床家としての彼女の姿が髣髴とした。何十年も昔、私が出逢った頃の彼女そのままに……。(事實は、ここでのこのマーサ・ハリスはそれよりも幾つかお若いはずだが。。)

【タヴィストックの伝統】とは何かといえば、それは「観察 observation」ということに尽きる。それもドナルド・メルツァー言うところの《精神分析的観察 psychoanalytical observation》なのである。臨床の場においてそれがどのように実践されるのかを知る機会が、まさにこの論文中の〈Mrs.マーサ・ハリス at work〉にあるといえよう。そのあらましを彼女自身がその平易な語り口でわれわれ読み手に語ってくれている。そこから彼女の‘まなざし’の動きがどのようなものかは、幾らかそれら表面的なものはその対象への言葉掛けからも覗かれる。だがここではむしろ折々に隠された見えないところでの彼女の心の動き、つまりは‘まなざし’の行方を辿ってみよう。実に面白い！己の内側に、己の意識の底に彼女は深く潜ってゆく。それが見て取れる。彼女の今・ここで見たもの・見ているものは、瞬時に過去の経験から貯えられていたさまざまなイメージたちと交錯し、浮かんだり沈んだりする。一瞬ジグソーパズルのピースの箱がひっくり返ったような混乱の極みともなろう。やがてそこから幾つか‘形’らしきものが見えてくる。そうした‘形たち(パターン)’がそれなりの‘筋’を伴って動いてゆこうとする。それを彼女は辛抱強く待っているのだ。決して興奮しない。にこやかに、穏やかに相手と呼吸を合わせて、楽な息遣いを心掛けている。時折ウンウンと頷きを合いの手に、相手がゆっくりと腰を据え、ここに居てもいい、話しても大丈夫といった気配になるのを待っているのだ。彼女の間合いの取り方のうまさが見られる。

そして何よりも肝心なのは彼女の‘地に足の付いた’目線である。まるで闇にサーチライトを照らすみたいに、彼らの‘生きている日々の暮らしの現実’を傾聴しつつ、その‘まなざし’はどこに介入すべき点があるのかを探ってゆく。そして、その結果が実に‘地に足の付いた’物言いとなる。例えば、このウィリーの事例では、とにかく子どもの不眠のせいで母親が疲労困憊している事実をフォーカスし、そして彼女には休息が必要だろうと告げる。何かしら魔術的な解決策が語られると身構えていた親は拍子抜けしたであろう。母親が不眠そして疲労が嵩じて、拒否反応を起こしている。目の前のことの焦点がぼやけて、考えられないといった思考の凍結(フリーズ)状態にある。ウィリーの問題行動をどうするかという前に、まずはそこをなんとかしなくてはというのがマーサ・ハリスの着眼点であった。そこからさらに父親の活力 competence に目を付けた。ユーモアと余裕ある態度で息子に接するその彼の態度から、この父親を通してどうやらウィリーから(そして母親からも)覇気を引き出すことが出来そうだというのが彼女の勘どころ。そこさえ抑えれば、あとは彼らがやってゆけるのではないかと。その後の成り行きを父親に手綱を握らせたとも言える。臨床家としての‘直観’である。ここにマーサ・ハリスの「観察」の妙技を見る思いがした。

ここでマーサ・ハリスに深く意図されていることは、「まなざしの回復」であろうと思われる。まなざし即ちattention(注意力)ということ。それは親子間でもそうだが、夫婦間でもそれが問われていた。互いに‘まなざし’を向け合うこと、そこから何かしら気づきを拾うことはできないか。何か見落としている、気づいていても自覚されていない何か、それがあのではないか。どうすればいいのか、本当のところ彼らは分かっているはずだといったこと。そこへ‘まなざし’を向けてゆくお手伝いをしてやること、取り敢えずはそれだけのこととして己の立場を限定してみる。この慎ましさ、謙虚さがいい！無論のこと、「まなざしの回復」から彼ら夫婦がやがてどのような行為に及ぶのか、具体的にどう動くのか、そこまで見通してきていたわけではない。

例えば、父親とウィリーとの間の煙草の箱を巡っての攻防戦を眺めながら、ここにまだまだ‘まなざし’の交差し合う余地があると彼女は見て取った。二人の間の悪戯っぽい戯れに、<ここ掘れ！ワンワン！>といった嗅覚が動いたようだ。この彼女の<これなら大丈夫そう・・・>といった感触が、手も足も出ない、身動きも付かずに行き詰まっていた彼らを後押しした。マーサ・ハリスの<ウィリーがお気に入りのことって何ですかしら？>との問い掛けをきっかけに、改めて彼らはウィリーへと‘まなざし’を向けてみた。ああそうだ、そう言えば・・・と彼らに気づきが蘇った。知っているのに知らないでいた、それを思い出せばいいといったことだ。それから、そこから手が出た。つまり「ブランコ」作りという妙案が思いついたのだ。これがブラボー！であった。さらにはウィリーを外の庭で自由に遊ばせるための具体的な手立てが実行されたわけで。<無理です！ダメです！いけません！>ではなく、どうしてやればいいのかと心の向きを変えたとき、からだが動いた。手も動いた。親子の膠着状態に風穴が開いたのである。

『考察』がなかなか面白い。精神分析を‘謎とき’とのみ考える向きには物足りないであろうが。確かにこれがジグソーパズルとしたら、実に多くのピースが見当たらない。それでも尚、彼女はそれら空隙を満たし、見えない糸で繋がりを回復させながら縷々述懐している。それらはいかにも後で経験を論理づけたふうにも見えなくもないが、事実は違う。実際のところ彼ら(Mr. T & Mrs. Tそしてウィリー)に待合室で出会ったときから、瞬時に直観されたことがその後あっちこっちへと連想の糸の列なりとなって拡がってゆく。そして親達の語る事柄から、そして目の前で繰り広げられている事柄からその裏づけを取る。「直観」は、やがて徐々に何らかの「認識」へと導かれてゆく。未知なる空白はそのままに・・・彼女の思考の流れの背景には、母子観察ならびにセラピイの現場で蓄積された膨大な量の経験が総動員されている。彼女こそが、即ち「タヴィストクの伝統」なのだ！こうした連想を紡(つむ)ぎ出す力、そしてこの事象の本質を剔(えぐ)りとる、その眼力こそがマーサ・ハリスの真骨頂と言えよう。

たくさん観察の‘事実’こそが彼女のなかで‘命綱’である。飽くまでも‘現場主義’といっていだらう。今・この‘謎’を解き明かすこと。しかも銘々の「こころの痛み」にあたたかく寄り添っている。そこへ彼女の視点(まなざし)は収斂されてゆく。母親にも子どもにもいずれについても・・・未消化なまま、未解決なままで‘謎’に耐えながらも・・・いちいち解釈をされずとも、彼女のまなざしに‘理解された’と信頼を寄せ、やがて母親のこころが動き出した。注意力が蘇った。息子へのまなざしが回復してきた。

そして困難の打開策を具体的に講じることも出来てゆく。これでよし、と彼女は引き際を承諾する。専門家としての出番は此処までと幕を下ろすのだ。しかし尚も、埋められない穴、なぜだったのか？どうしてなのか？といった謎は彼女の頭のなかを行きつ戻りつしている。いつか別の機会に埋められることであろうが…。その後折々に頭を擡げる。あれは何だったんだろう、どうして、何故？といった具合に。その未だ見つからないジグソーパズルのピースを探している。たまたま臨床の場で、そして観察の場で、スーパービジョンでもそれを見つけて拾うことがあったろう。連想が断ち切れたとしても、また蘇り、その思考の糸口はさらなる連想へと広がってゆく。そうか、そういうことなのか！と折々に腑に落ちたということがあったろう。『考察』でブランコと絡んでウィリーの「閉所恐怖症」が解説された箇所は殊に秀逸といえようが、ここにはMrs. ビックというよりむしろ、 دونالد・メルツァーの臨床知見の影響が濃厚といったふうに覗かれた。そこから成程メルツァーとの邂逅も、そして後のお二人の結婚も必然であったと頷ける。

そんなふうに、絶えず頭のなかで忙しくあっちこっちするのがMrs. マーサ・ハリスであったろう。殊更《ワーク・ディスカッション・セミナー》などはいい例だ。誰も彼女の代わりはできまい。その懐の深さにどれほどの人が魅了されたことか。そして誰よりも彼女自身がどんなに面白かったろう！他人の経験を通して、飽くまでも彼女がころのうちに仕舞いこんでいた謎が、なぜ？どうして？と探しものを始めるのだから。それらは常に彼女の中で出番を求めて列をなしているみたいだ。だから決して自分以外の誰かの仕事だからと退屈することはない。常に自分ごととしてそれを‘体験’できるのだ。それら耳にし目にする事柄が、彼女の中で賞味されてゆく。面白がって永遠に追っかけている。なぜかしら、どうしてなのかと…。解ったつもりにならない、解ったふりをしない。どうにか解ったとしても、それですべて片が付いたとは言えまい。片付かないものが彼女のなかにたくさんあって、いつもそれらと格闘している。うまく‘片付いた’話が出来ないといったこともあろう。だが、そこに妙趣がある！変に凝り固まったふうに自分の見解を打ち出すことをしない。だからマーサ・ハリスには持論も定説もないと、ややもすれば彼女の独自色が疑われることになる。一括りしないからだ。いつもころに空きスペースを作っている。それを埋めるのはいつも相手次第が半分、自分次第が半分といった感じ。自分の‘見え方’を固定しないのだ。師と仰ぐ人たちにも執着はしない。事実彼らの卓越した理論を継承しているのは確かだが、その場その場でいとも簡単に捨てて顧みないといったこともあろう。放念する潔さ！だけど、ころに自由がある。目の前の「真実」に魅了されてゆく。嬉々として。それほどに真実は変幻自在であるということであろう。彼女がスコッチ・ダンスで「リール」を踊るのに一曲では決して終わらなかつたとメルツァーが語っているのも実に愉快だ。視野のなかに入ってくる多様な見え方を探ってゆく。こうも見える、あんなふうにも見えるといったふうに。だからもっともっと…。なる！円環は絶えず開かれたまま。留まることを知らない。それは螺旋状に渦巻きが巻かれてゆくような具合で、こういうことではなからうかと考察をし、一旦はそれを閉じるだろうが、やがてまたそこからさらなる渦巻きが…。傍から見れば結構面倒臭いかも知れない。「これでもう終わり！」がないとしたら、解ったつもりには到底なれないわけだから…。でもじっくり付き合うと実に面白い！1984年に彼女は車の事故に遭い、「言葉」を奪われた。痛恨の極みである。彼女の「もっと、もっと…」がもっともっと聞けたらと…。無念に思う。だけど、彼女の‘まなざし’は生きている！私たちが皆のころの裡に…。とことんそう思いたい私がここにいる。 (2015/11/05 記)